

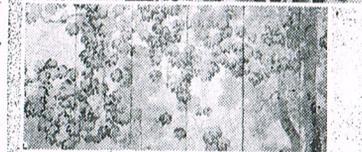


理想の美人

小 品
永代美知代

「一人別れて来たはしたのもの、登代子は別段何處へ行くあてもありません。おまげに後では定めし皆なで以て笑ひ崩れて居るのだからと思ふと、今更何だか途方もない残念な事を仕出来したやうな口惜しさをさへ感じました。」

「私だって少し人並の容色に産れて来たら……」
涙がボタボタ溢れて落ちました。そして直ぐ又掻きむしるやうな嫉妬が胸一杯を麻のやうにもつれ亂します。



(峰觀大山横)色秋 去來雲

「お前美人が羨しいのか。」
「えい。」
「じつと見詰めたお婆さんの眼色の怖ろしさ、まるで心の底まで覗きたいでは置かぬ鏡に、登代子は肩をすぼめて俯向きしました。笑しけりや都合で手障つて美人にあけても可い、何でも望を云つて御覽。」

「まあ、ではどうぞ私の鼻を、否それよりも……色を白して頂きませうか、否それよりも……」
登代子は何か頼んで好いか解りませんでした。

「周りではいけな、落付いて順順に云つた方がよろしい。私に勝つても望を吐いてあげるから。」
「では濟分までんが眼鼻立ちをよくして、色を白く。」
「よろしい、それから。」
「あの、髪の色をよ、薄山にして、體の形を電氣にどうぞ。」
「よろしい、それから。」
「左様です、それ、もうなかつたかも知れませんが、それ、これよく聞いて。」

「お婆さんは不審氣にお婆さんを見上げました。」
「たわけ者奴！ お前は先刻友達の前へ何と云つた！」
「ハッ！」
登代子は恐れ入つて平伏しました。併しあれと自分の聲で氣がついて、四周を見廻すと、今のは假寐の夢でもあつたのか、氣味悪なお婆さんの影も見えませんでした。何時の程にか夕が追つて豆腐屋の喇叭と、夕刊屋の鈴の音が町々に騒々しい。

「お婆さん、これよく聞いて。」
お婆さんは懐中鏡を渡して呉れました。
「有難う御座います。」
鏡に寫つた顔を見て、登代子は天へも昇る心地に喜びました。
「お婆さん、すつくりよくなりました。有難う存じます。」
「また、髪へも、髪があれは遠慮なく云つて御覽。」
「では肩と胸の鼻をどうぞ。」
「それから。」
「もう結構で御座います。」
「まああるなら、。」
「い、え、もう、薄山で御座います。」
「鼻を左様か。」
「御座いません。」
「そんならお前日本當の美人になり度いと思ひなさいのか。」
「え？」

「登代子は第一それが忌々しくうて堪りませんでした。」
ふと、氣がつくと誰だか背後に居さうで、振り向いて見ると、白髪のお婆さんが口元に氣味の悪い薄笑ひを浮べながら、じつと登代子を見据えて佇みました。
「お前美人が羨しいのか。」
「えい。」
「じつと見詰めたお婆さんの眼色の怖ろしさ、まるで心の底まで覗きたいでは置かぬ鏡に、登代子は肩をすぼめて俯向きしました。笑しけりや都合で手障つて美人にあけても可い、何でも望を云つて御覽。」
「まあ、ではどうぞ私の鼻を、否それよりも……色を白して頂きませうか、否それよりも……」
登代子は何か頼んで好いか解りませんでした。